

目次

緒言	ii
『新ローマ史』	1
第3巻.....	1
第4巻.....	27

緒言

本書はゾシモスがギリシア語で著した『新ローマ史』(ἱστορία νέα) の1814年の匿名訳者による英訳 (History of Count Zosimus, Sometimes advocate and Chancellor of the Roman Empire) からの重訳である。

この分冊では全6巻のうち第3巻と第4巻を収録する。時代としては第3巻が355年のユリアヌスの副帝登位から364年のヴァレンティニアヌス一世の即位まで、第4巻がヴァレンティニアヌス一世の治世から395年のテオドシウス一世の死に至るまでを含む合計40年の期間である。

この分冊には「蛮族たちの帝国」という副題を邦訳者の創意というか、独断でつけてみた。それは、これまで少しずつ大きくなっていったローマ帝国内での蛮族の存在感が飛躍的に増大したのが見て取れるのがこの時代であるが故である。これは蛮族が「支配する」とか「蛮族化した」とははっきり言えるほどではないにせよ、彼らの影響力は日増しに増大し、もはや彼らなくしてローマ帝国の存立は難しくなっている時代である。

一例を挙げるとすれば、ユリアヌスが正帝に推戴される時に軍人たちが行った盾の上に載せるというパフォーマンスはゲルマン人が王を推戴する時に行う儀式であり、これは軍内でのゲルマン人の割合が(具体的な数値を出すのは難しいにせよ)決して低くはないことを示している。さらにその盾自体がローマ軍と聞いて我々が思い浮かべるような長方形で反った形状の盾(スクトゥム)ではなくなりつつあると同時にゲルマン人が使っているような丸型や楕円形が主流になっており、人員、装備や外見、戦術でも蛮族化が進行していた。

蛮族の増加は兵卒だけではなく将軍においても顕著であり、この分冊で登場する軍務長官のかなりの部分が蛮族出身者であることは彼らの名前を見るだけでも分かるだろう。

さらにメロバウデスやアルボガステス、そして第5巻で活躍するスティリコのように軍人としての能力や地位を抛り所としつつ政治的権力を行使し、あまつさえ皇帝の擁立すら行った蛮族出身者の存在もまた軍を超えた帝国の統治機構での蛮族の存在感の増大を示している。

こういったわけで、この時代を象徴するものとしてこのような副題をつけてみたという次第である。

訳について

訳文の〔 〕は邦訳者による補いである。また、読みやすさのために一つの文を複数の文に分割したり、代名詞を固有名詞に置き換えるなどした。

内容や出来事の前後関係の理解等に必要と思われる箇所には邦訳者が独自に訳注を付したが、逐一付けていれば訳注が膨大になる恐れがあるため、ある程度人口に膾炙していたり、インターネットで簡単に調べられると思われるようなことは邦訳者の判断で省いた。

本書は学術的な貢献を期してというよりは一介の好事家の楽しみとして、そして邦訳者自身のような一般の歴史好きの知的好奇心に応えるために訳されたものである。邦訳者としては手を抜いたつもりはないが、重訳である点、用いたテキストの古さ、歴史学の専門的な教育を受けたわけではない邦訳者の資質等を鑑み、何らかの資料として用いる場合は他の資料、底本なりギリシア語原文と突き合わせることをお勧めする次第である。

ともあれ、本書はローマ帝国の「衰退」と「変容」が起こり、歴史がドラマティックに動く興味の尽きない変革期の記録であり、これを現代について考えるための鑑として読むにせよ、歴史をそれ自体で味わうために読むにせよ、是非とも楽しく読んでいただけるのであれば訳者としては幸甚の至りである。

2026 年 8 月

今居清綱

『新ローマ史』

第3巻

1 コンスタンティウスは副帝ガルスを上述のように始末した後、イタリアへ向かうべくパンノニアを発った。しかしローマ人の領地の全域に対する夷狄の侵略が横行しており、フランク族、アラマンニ族、サクソネス族⁽¹⁾はレヌス川近くの四〇の都市を我がものにしたのみならず、夥しい数の住民を連れ去ってそれ相応の量の戦利品を運び去ることでそれらを荒廃させており、サルマティア族とクァディ族⁽²⁾はパンノニアと高地モエシアを抵抗を受けることなく荒らしていた。それに加えて以前は副帝ガルスからの攻撃を恐れて大人しくしていたペルシア人が絶えずオリエンス諸州を悩ましていたことを知ると、彼はこういった状況を憂慮してどうしたものかと案じてこのきわどい時期にあって問題を処理するのは自分には荷が勝ちすぎると考えた。しかし単独支配を望んでいて誰一人として友と呼べる者がいなかったために彼は他の者との連合政権を作ろうという気にはなれなかった。このような状況にあって彼は途方に暮れた。だが、帝国が最大の危機にあった時、コンスタンティウスの妻で、見事な教養を持ち、その性が通常持つ以上の知恵を持つ女人であったエウセビアがガルスの弟でコンスタンティウス〔一世〕の孫であるユリアヌス・カエサルにアルプスの彼方の地域の統治を委ねてはどうかと彼に勧めた。皇帝が血縁者の全員を疑っていたことを知っていた彼女は彼の裏をかいだ。勉学に全てを捧げてきたユリアヌスは国家の謀議について何一つ知らない若者だと彼女は見て取っていた。世界を股にかける仕事には全く無経験であるがためにユリアヌスの方が誰か他の人よりもコンスタンティウスの目的には相応しく、彼が幸運に恵まれて成功すればそれは皇帝の手柄になるだろうし、逆に彼がへまをやらかして死ねばコンスタンティウスは彼の跡を継ぐ皇族を失ってしまうことを彼女は彼に気付かせた。

2 コンスタンティウスは妻の助言に賛成するとアテナイにいたユリアヌスに手紙を出したが、この彼は哲学者の中で暮らしてありとあらゆる学問の修得において他の皆から抜き出していた。したがってユリアヌスがギリシアからイタリアへと戻ってくると、コンスタンティウスは彼を副帝と宣言して自分の姉妹のヘレナを娶らせ、アルプスの彼方へと送り出し

⁽¹⁾ ゲルマン人の一派で、元は黒海北岸に住んでいたが紀元前 200 年頃にエルベ川下流域に移動した。4 世紀以降はフランク族と戦ったりシュヴァーベンやチューリングゲンに拡大するなど活発な動きを見せた。

⁽²⁾ スエビ系ゲルマン人の部族で、紀元前 8 年頃にドイツ中西部のマイン地方からモラヴィアへと移動し、後にパンノニアへと移動した。1 世紀後半にドミティアヌスと、2 世紀後半にマルクス・アウレリウスと戦い、後者に敗れた後もローマ領を襲うなどしてローマ帝国にとっての脅威であり続けた。

た⁽³⁾。しかし生来の疑り深さから彼はユリアヌスが自分に忠実だとは信じておらず、したがって彼にマルケルス⁽⁴⁾とサルスティウス⁽⁵⁾を付けて送り出し、副帝ではなく彼らに統治の全てを任せた。ユリアヌスを片づけるとコンスタンティウスはパンノニアとモエシアへと進軍し、クァディ族とサルマティア族をそこで鎮圧して東進し、ペルシア人が侵入したことによって戦争に突入した。ユリアヌスは彼の支配地となったアルプスの彼方のガリア地方にこの頃までに到着した。夷狄が同上の暴虐を続けているのを見て取ると、エウセビアは以前と同じ理由でコンスタンティウスにその地方の統治権全てをユリアヌスの手に渡すよう説き伏せた。彼についてこれまで書いた人たちのいずれもユリアヌスの資質に対する正しい判断へと完全に至らなかったものの、その時以降の短い生涯での彼の行動については歴史家と詩人の長ったらしい話で読めるだろう。望めば誰であれ彼自身の演説と書簡を見て、その中で彼が公務のために何を実施したかを見て取れよう。なるほど私は彼についてより完全な説明をするつもりだが、私の歴史書の順序を遮るべきではあるまい。しかし私は彼の最も顕著な行動と、とりわけ他の人たちが書き落としてきたような事情を適切な箇所で記すつもりである。

3 こうしてコンスタンティウスは副帝に彼の統治地域への完全な権限を与えると、ペルシア人と戦争を行うべく東進した。ユリアヌスは実に破滅的な状態にあったガリア・ケルティカの軍事的状況、そして夷狄がレヌス川流域を海港都市に至るまで何の抵抗も受けることなく我が物顔でうろついているのを見て取ると、残りの敵についても調査した。その地域の人々が夷狄の名を聞くだけで震え上がることを彼は知った一方、コンスタンティウスが彼につけて送った兵は三六〇人足らずであった。これは彼が常々言うところではせいぜい祈り方くらいしか知らない連中だったので、彼はできる限り多くの兵を徴募して多くの義勇兵を得た。また彼は武具を分配し、いくつかの町で大量の古い武器を見つけると修繕して兵

⁽³⁾ ユリアヌスの副帝即位は355年11月6日。当時彼は24歳だった。

⁽⁴⁾ ガリアで騎兵長官(356-357年)としてユリアヌスに仕えたが、ユリアヌスがセノネス(現サンス)で夷狄に包囲された時には救援を送らなかった。このためにマルケルスはコンスタンティウス二世によって解任された。

⁽⁵⁾ サトゥルニニウス・セクンドゥス・サルスティウス(サルティウスとも)。ユリアヌスの最側近。ガリアで生まれ、ユリアヌスに仕えた頃にはすでに老人だった。ガリアで赫々たる武功を挙げたユリアヌスに対する皇帝や廷臣たちの猜疑からか、サルスティウスは359年初めにはガリアから異動させられた。ユリアヌスが単独皇帝となるとオリエンス道長官に就任し、コンスタンティウス二世時代の高官たちに対するカルケドン裁判で判事の一人を務めた後、ユリアヌスのペルシア遠征に参加した。ヨウニアヌスの下でもサルスティウスは留任し、ウァレンティニアヌス一世の下では一時職を解かれたがすぐに復帰した。367年に引退した。没年は不明。

士たちに分配した。夷狄の大軍がレヌス川沿いにあるアルゲントラトゥム市⁽⁶⁾近くの川を渡ったとの知らせを斥候が持ってくると、彼はそれを聞くやすぐに大急ぎで軍を率いて行き、敵と一戦交えるや筆舌に尽くしがたいほど見事な勝利を得た。六〇〇〇人の兵がその場で殺され、それ以上の兵が川に追い詰められて溺死したと言われている。つまり、この勝利はアレクサンドロスのダレイオスへの勝利と比べてもいかなる点でも見劣りしないものだと分かるだろう。しかし我々は勝利の後の副帝の行動を述べずに通過すべきではあるまい。彼はよく訓練されてその勇気と経験に彼が信頼を置いていた六〇〇騎の騎兵部隊を有していたので、彼らの仕事ぶりに最も自らの希望を賭けていた。なるほど戦いが始まると、全軍が断固たる決意を示して敵に攻撃をかけた。しかしほどなくローマ軍は圧倒的に優位に立ったにもかかわらず彼らだけが逃げて持ち場を不名誉にも捨てた部隊になったため、副帝は少数の手勢を連れて駆け出して彼らに勝利の分け前のために戻るよう呼びかけ、そのために手を尽くしたものの彼らに戻るよう説き伏せられなかった。このために彼は彼らを夷狄に国民を明け渡した裏切り者だと呼ばわり、当然ながら彼らに憤慨した。これまでに彼は彼らに通常の法定の罰を課したことはなかった。しかし彼は彼らに女物の服を着せ、このような罰は男である兵士には死ぬよりも酷いと考えて野営地を通して他の地域へと彼らを率いてった。なるほど彼にとっても彼らにとってもこの出来事は非常に幸運だった。ゲルマン人との二度目の戦争で彼らは以前被った恥辱を思い出し、ほとんどの兵が戦いで勇敢に振る舞った。

4 それらの出来事後、彼は全ゲルマン民族との戦争のために兵を挙げた。だが彼は夥しい数の夷狄を敵に回すことになった。したがってローマ人の国ではなく彼らの国を戦場にしようと望んだ副帝は彼らが来るのを待たずにレヌス川を渡った。そうすることで諸都市は夷狄の略奪を逃れた。それ故にこの上なく激烈な戦いが起こった。多数の夷狄が戦場で殺された一方で残りの者は逃げ、副帝の追撃を受けてヘルキュニアの森⁽⁷⁾に入ってその多くが殺された。彼らの将軍の息子ウァドマリウス⁽⁸⁾が捕虜になった。軍は戦勝の歌を歌いながら

(6) 現在のストラスブール市。357年に起こった同地での会戦でユリアヌスはアラマンニ族に対して決定的な勝利を挙げた。

(7) かつてフランス北東部からドイツ南部を経てカルパチア山脈あたりに至るまで伸びていた大森林。

(8) アラマンニ族の王グンドマドゥスの兄弟で、兄弟で共同で王位についていた。ガリアを略奪していた兄弟は354年にコンスタンティウス二世の討伐を受けたが停戦。その後グンドマドゥスが暗殺されて単独の王となったウァドマリウスはコンスタンティウス二世に使喚されてガリアを攻撃した。アルゲントラトゥムでユリアヌスに敗れて359年に講和した後、彼は他のゲルマン諸部族と共に再びユリアヌスに敵対し続けた。ウァドマリウスは他のゲルマン諸王たちと共にユリアヌスに捕らえられ、ヒスパニアに流された。ユリアヌス死後のプロコピウスの乱の際にウァドマリウスはフェニキア担当軍司令官（dux

帰国し、副帝をその偉業のために讃えた。ユリアヌスは自身が得た勝利は正帝の幸運のためであるとしてウァドマリウスをコンスタンティウスのもとへと送った。その間、非常に危機的な状況に陥った夷狄は副帝が妻子の住む地まで進撃してくるのではないかと考えて妻子を、そして民族全体の全滅を案じ、便宜を図ってくれるよう請願すべく使節団を送った。これによって彼らは今後一切ローマ人と戦争をしないという義務を負った。副帝は彼らに、彼らが征服した様々な町で以前に得た捕虜を返還するまでは平和の申し出に耳を貸すつもりはないと言った。彼らがこれに同意して生き残りを全員送り返すと約束すると、副帝は一人の捕虜も夷狄に抑留されないことを確実にものとするために以下のような手を使った。彼は各々の都市と村から逃げた者皆を呼び寄せ、各々の都市と村から敵によって連れ去られた者の名前を提出するよう求めた。彼らの各々は血縁や友情から、あるいは隣近所にいたために、もしくは他の何らかの理由で知っていた者の名を挙げ、彼は帝国の公証人たちに彼らの一覧を持ってくるよう命じた。彼らは密かにそれを行ったために使節たちはそのことについて何も知らなかった。この上で彼はレヌス川を渡って捕虜を返すよう彼らに命じ、彼らは時を置かずそれに従った。自分たちが捕らえたのはこれで全部だと彼らが明言すると、高い玉座に座して公証人たちを後ろに控えさせていた副帝は合意内容に則って夷狄に捕虜を見せるよう命じた。捕虜が一人ずつ彼の前にやってきて自分の名を述べると、副帝のすぐ後ろに立つ公証人たちはそれらが全部正しいかどうかを書類を見て確かめた。その後、彼らが書き留めたものと副帝の前に現れた人とを比べ、別の土地の住民が目の前にいる人よりも多い名前を出しているのを見て取ると、彼らは副帝にそれを伝えた。全ての捕虜を届けておらず、公証人の報告にあるがまだ特定の土地の人の名前が出ていないと、彼は使節団を彼らの部族への戦争で脅した。これを聞くと夷狄は、副帝は神の知によって明かされた最も難解な秘密の本性を知っているのだと程なく想像したため、生け捕りにしていた者全員を引き渡すことを約束し、彼らの国での仕方で誓って約束を遵守した。

5 副帝はこのことを行い、彼らが略奪した四〇の都市から捕らえられたと思しき多くの捕虜を取り戻すと、諸都市が完全に破壊されていて土地は長らく耕作されることなく放置されており、夷狄によって連れ去られた人たちの間で物資の欠乏が起こっていたのを見て取ると、何をどうしたものかと途方に暮れた。それというのも近隣の諸都市は夷狄の暴虐を恐れて自分の使う分にも事欠く有様であったため、彼らに物資を用立てることができなかった。したがって何をすべきかを考慮すると、彼は以下のような計画を立てた。レヌス川がゲルマニアの端でアトランティス海へと注ぎ、ブリタンニア島はこの河口からおよそ九〇〇スタディオンのところにあつたため、彼は川岸の森から木材を切り出して八〇〇隻の小舟を建造し、それらを穀物供給のためにブリタンニアへと送り出してはレヌス川を遡って運ばせた。航路は短く、これをしばしば繰り返すことで彼は諸都市に戻ってきた人たちに食料

Phoenices) として現れており、この時にウァレンスによってニカイア奪回へと送られ、371年にはペルシア軍と戦った。